

森から世界を変えるプラットフォーム主催「森林×海外 キャリアセミナー」概要

2023年8月8日（火） 12:00～13:30（オンライン）

1. **各登壇者によるご発表** ※登壇者の発表資料も掲載しておりますので、ご覧ください。

◆松尾 美佐紀氏（一般社団法人 日本森林技術協会 国際協力グループ技師補）

大学卒業後、オランダの大学に留学し森林自然保全学修士を取得。その後就職までの半年間海外 NGO でのインターンなどののち、2021年より一般社団法人日本森林技術協会に就職。

大学時代は教育、国内森林、国際の三つの軸をもって、教員免許の取得や林業女子会の鳥取支部の設立、気候変動枠組条約 COP23 への参加等様々な活動を行った。大学院では、①国際森林政策に関する研究・ネットワークを築くこと、②国際機関で森林保全プロジェクトの現場を経験する、③英語力をつけることを目標とした。

開発コンサルタントとしてこれまで JICA や民間企業から委託された7件の海外業務に携わっている。体力のある20代のうちに途上国の現場を見ておきたいとい考え、現在の職場に就職した。成果が直接目で見られるところが魅力的と考えている。

「森林・林業ウーマン@海外部」([森林・林業ウーマン海外部 | Facebook](#))にも参加している。

◆松本 由利子氏（一般社団法人 コンサベーション・インターナショナル (CI)・ジャパン シニアプログラムコーディネーター）

大学卒業後海外協力隊でザンビアの農村に2年間滞在。コンサル会社にてカンボジアのプロジェクトに2年従事した際に森林破壊を目の当たりにし、「環境と開発」を勉強するためイギリスの大学院に留学。帰国後2年半東日本大震災の被災地支援に携わり、その後 JICA で専門家や企画調査員として様々なプロジェクトに携わった。CIに入る際は一貫性がなくバラバラな経歴に劣等感を感じていたが、CIはアメリカに本拠を置く NGO であり、アメリカ的な考えでは、色々な経験はむしろ強みと言われた。

CI ジャパンでは日本企業と連携し、海外での保全活動を実施。海外事業の実施管理とドナー企業とのコミュニケーションを主に担当している。これまで環境保全は企業にとって CSR や社会貢献の位置づけだったが、本業のビジネスとして取り組むようになってくると感じる。

これまでの経験で役に立ったことは、ザンビアの農村で村人が日々どのような関心を持って生きているのか感じられたこと、JICA での途上国で事業を行なう上での経験、東北の復興支援で経済の立て直しや地域の自然資源活用の重要性を感じたことなど。目の前の出来事に潜むチャンスをつかんでいく「計画的偶発性理論」というキャリア形成の理論があるが、自分は結果的にそのようなかたちで今に至っている。

◆仲井 一志氏 (ヤマハ株式会社 楽器・音響生産本部 おとの森プロジェクト プロジェクトリーダー)

大学および修士課程で森林科学を学んだ。ヤマハ入社後は希少木材にかわる木質の複合材料の開発など材料系の開発に取り組んだのち、2015年からタンザニアで林野庁や JICA も協力も得ながら、「アフリカン・ブラックウッドの持続可能な利活用に向けたタンザニア森林保全モデル構築」の取り組みを始め、現在「おとの森プロジェクト」として、楽器に使える木材を生み出す森を現地の人とともに育成する事業を行っている。

タンザニアのアフリカン・ブラックウッドの事業では、①良質材を育てていき将来に資源を残す、②いまある木材を効率よく大事に使う、③現地の人々に森林保全に興味を持ってもらう (インセンティブ向上) に力を入れている。

森林保全は良いことだが、長く続けるには「ビジネス」にすることが、更に、自分がいなくても回るようにするには研究も重要と考えている。

◆大西 信徳氏 (DeepForest Technologies 株式会社 代表取締役)

森林科学・生態学を学び、博士取得後に DeepForest Technologies を設立、大学で博士研究員も続けている。ドローン画像に AI を活用することで、高精度な樹種識別の開発に初めて成功。日本全国での汎用性の検証、ボルネオ熱帯林にてバイオマス量・生物多様性の評価手法への応用も研究。樹種識別技術と付随する樹木検出、サイズ推定機能等を開発するとともにソフトウェアを開発。2022年3月に DeepForest Technologies を設立した。

森林保全を目的に技術開発するには研究者より起業の方が適していたため、起業を選んだ。研究機関よりも企業の方が大きな資金とスピード感を持って開発を進めることができ、技術開発を進める場合の最短ルート。やりがいは、良い技術や製品は現場で実際に使われ、褒められ感謝されること。

## 2. パネルディスカッション・質疑応答 (敬称略)

◆Key Question : 「森林×海外」の面白さややりがい等について

- 松尾 : 森林破壊は海外で起きているため、環境問題の解決に携わっているという実感がある。
- 松本 : 海外の現場に行けることは最大のモチベーション。森や人が育つのを実際に見ることができる。
- 仲井 : 色々な文化・人に触れることができる。日本よりも成果が出やすい。
- 大西 : 原生林に滞在し野生動物に会うことができ、そういったものを守ることができる。

◆Key Question : 「森林×海外」分野の今後の可能性や展望について

- 大西：カーボンが注目されるようになってきているが、CO2 吸収量などの実際の計測などで技術が不足しているところがあり、補うことでカーボンクレジットの売買などが可能になってくる。
- 仲井：今後は益々質が問われるようになる。技術・ツールも揃ってきているため、どう使うかが重要になる。
- 松本：これまで森林保全はビジネスの責任の外だったが、パーム油やカカオ、牛肉など森林破壊につながるビジネスがあり、それらを動かさなければ森林を保全することは出来ない。これまで森林保全に携わる道は少なかったかもしれないが、今はビジネスの中で森林保全にかかわる道もあり、スタートアップのような形で新しい道を切り開く可能性もある。資金の流れも炭素クレジットや生物多様性クレジット、ESG 投資などもあり、お金の流れが大きく変わってきており、これまでできなかったことができるようになる。一方 2030 年がゴールとなっており、社会全体でスピード感を持って動かしていく必要もある。
- 松尾：国際的議論をフォローしつつ、現場で森林のプロジェクトを実行できる人が今後も重要。一方、これまでは公的なアクターの議論で動いてきたが、最近では NGO やユース、民間のイニシアティブなどが議論を動かしているという流れがあるため、森林に具体的に関わっていない人も自分たちの声を上げていくことで流れに参加することもできる。

◆事前質問：営利・非営利それぞれの立場で「森林 × 海外」に関わるうえで、それぞれでできること・できないこと、それをどのように補い合っているのか？

- 仲井：企業としては自社のビジネスに直結しないことは出来ない。自社で出来ないところは他のステークホルダーの方に入ってもらうことも考えられ、ネットワーク構築も大事。
- 松本：NGO も企業をパートナーとしている場合、企業の関心・優先事項を優先することになるが、それ以外の地域や活動にも手を伸ばすことは出来る。しかし大きなインパクトを優先しがちで小規模の森林に手が回らないこともあり、地方の企業と連携して地元の保全に取り組むといった形の保全もあると考える。

◆事前質問：開発コンサルタントなど現地に近い立場で働くことと、国家公務員で川上の政策に関与する働き方の比較について

- 松尾：コンサルタントでは、実際にプロジェクトを通して能力強化される人々や、現場が変わっていく様子を見ることができるとやりがい。また、一つのプロジェクトだけでなく、同時に色々な国のプロジェクトに関わることもできる。プロジェクト対象国全体に裨益するような活動もできるが、世界の潮流などに関わることは出来ない限界はある。

- 川口技術審議役（林野庁より JICA へ出向中）：誤解があるかも知れないが、国家公務員は川上の政策ばかりではなく、海外を含め現場で活動することもある。実際、現在林野庁から 10 名程度が JICA の専門家として現場に出ている。国家公務員は、国際会議での日本政府の政策の反映や各国との調整など、大きな流れを作っていくという醍醐味があるほか、FAO や ITTO といった国際機関、NGO などと連携して違法伐採対策や生物多様性のプロジェクトを実施するなど、川中的な仕事をする機会もあり、様々な経験が出来るのが国家公務員のメリット。他方、2～3 年で異動があるため、一つのことをやり続けるのが難しいという点はデメリットといえるかもしれない。

◆事前質問：森林×海外を軸として働く上で必要なスキルは何か、またそれを高める手段は？

- 大西：やはり英語力を高めることは重要。
- 松尾：森林に関する専門性といってもセーフガード（環境社会配慮）やジェンダー、砂防、GIS、政策など様々ある。色々経験しながら自分が極めたいものを見つけてはどうか？資格試験や国連が開催しているオンラインのコース、JICA による能力強化研修などもある。現地でのコミュニケーションも大事になるが、相手に伝わる英語力が大切。新しい知識を素早く吸収して利用する臨機応変さも重要。
- 仲井：海外の文化への適応力も必要。すべてが用意されているわけでは無い環境で、自分で工夫して組み上げていく精神も重要。
- 松本：スキルより、自分が何をしたいのか見つけるというのが重要では？今の仕事も 10 年後には存在しない可能性がある。若いうちに現地の生活をしてみると、自分がどういふことをしたいのか見えてくることもある。機会があればぜひ現地に行ってもらいたい。

◆コンサルタントは新卒での就職が難しいと聞くが、学生時代に出来ることは？

- 松尾：自分の興味関心に沿って専門を極めていけば良いと思う。ベースになるのは語学力なので時間がある内に語学力をつけるのは必要。現場の経験のためには、色々な会社等がインターンを実施しており、途上国の現場に行く機会は色々あると思う。

◆海外での活動と生活とのバランスに関する工夫や悩みなどについて

- 松本：自分としては海外出張は負担になっていない。JICA では現場に 2～3 年行くことができたが、今はピンポイント。長くいけば現地のことが良く分かるが、逆に世界や日本の大きな流れなどが見えないこともある。今は視野が広がった。
- 仲井：長く海外に行くとなると家族から不満を言われることはある。家族に自分の仕事を理解してもらうことも大切。

◆森林をビジネスとして長く続けていくためのコツは何か？意義や付加価値をどのように

関係者に理解してもらうか？

- 仲井：色々な関係者に理解してもらうために、相手の立場から考えることが大切。日本に持ち帰ってでなく、その場で判断するスピーディな対応が必要になることもある。
- 大西：森林保全がお金に繋がりがつつあるが、なかなか進まないのは、お金がもらえるタイミングは数年後ということや、労力を割かなければならないことがある。説得するのもあるが、先に現地の人に資金が行くように費用を会社などで負担するというのもひとつ。

◆国内の森林分野で働く人へのエール・アドバイス等があるか？

- 大西：国内の森林伐採後の再造林率は3割のみ。放置するとシカの食害で裸地のままとなり、土砂災害の危険も。森林環境税やカーボンクレジットもあるため、木材の収益だけでなく途中で得られるお金を利用して収益を上げて、森林整備や植林を頑張っているってほしい。
- 松尾：学生時代に国内の林業従事者とお話しする機会があり、かっこいい印象を持っている。様々な取り組みがあるため、それらがつながっていけば盛り上がっていくと期待している。